

二〇一七年三月三十一日(多田神社 参加者一七名)

切り株をベンチとしたる落椿	せいじ
禁門をくぐれば苔の青畳	せいじ
猪名川の奇岩の河原春奏づ	せいじ
掌にのせて椿を愛おしむ	せいじ
朱の橋にぼんぼり吊るす花の宮	わかば
御手洗は苔むす巖水温む	わかば
山茱萸の黄を点したる神の杜	わかば
春雨に艶めく宮の石畳	わかば
春陰や砦めきたる築地堀	うつぎ
神名備の奥処山茱萸明かりして	うつぎ
石に伏し苔に仰向く落椿	うつぎ
苔の上へ捨て身さながら椿落つ	菜々
青葉して源家五公を祀る宮	菜々
春田打つ源家ゆかりの里に住み	菜々
囀に満つ神苑を逍遙す	治代
洞深く老いし大樹に春寒し	治代
やはらかに椿うけとめ苔の庭	治代

苔涼し瘰だらけなる御神木	ぼんこ
囀に耳そば立てし遥拝所	ぼんこ
雨空に山茱萸の黄を散らしけり	ぼんこ
案内の禰宜饒舌や春うらら	満天
風光る千木に葵の紋しるき	満天
猪名川の碧き水面を風光る	満天
鎮魂のごとく御廟へ春の雨	小袖
花の宮結界のごと築地堀	小袖
延べし手の上へ落ちたる椿かな	有香
招霊や源氏ゆかりの地に繁る	有香
潜戸の一步ためらふ落椿	よう子
菜種梅雨剥落烈し築地堀	よう子
落椿源氏ゆかりの神苑に	たか子
人馴れの鴨茎立を啄める	はく子

吟行句会みの選

二〇一七年三月三十一日(多田神社 参加者一七名)